

今人の名告に、必反字をもて、吉凶をいひて、とかくいふ事有、古へはなけれども、中古よりは似たる事あれども、今いふが如くにはあらず、今歸納字の事をいふは、その反たる字を名に用るにはあらず、中世のは、その反り字を、すぐに一名の様に用ゐたる事有也、されども多くは見えず、たまさかの事也、阿彌陀を網田と書、史を不比等と書、馬養を宇合と書、旅人を談等と書たるが如き、音訓相交へてかきたるさま、反名のよりて出たる故なるべし。

〔老牛餘喘 初篇 下〕實名

凡人の實名本字ハ可書、今從俗トをつくるに熟字を用ひ、又よしある字を用ふる事もあれど、大かたは韻鏡を考へて、反切して其人の性にかなふ字をつくる事、世の常なり、おのれ思ふに、字音もてよばむには、さもこそあらめ、訓をもて唱ふるものにしあれば、字音は反切して性にかなへども、訓の音は、性にかなはぬが多、かれば、益なき事なり、通稱に用ふる名頭といふ物も、字音もてよぶ名に用ふるはかなへども、訓を用ふるはかなはず、たゞへば富繁トミシケの音は水性にはかなへども、その訓はかなはざるがごとし、よておもふに、音もて唱ふる名頭は、性にかなひて、下には兵衛にても衛門にても、又は太郎次郎などにても、か、はらぬがごとく、實名も、よみはじめの音だに性にあはゞ、性にあはず、タゞミ訓ば、かなふがごときこれなり、下はか、はらずして有なむ物なり、これは世にしたがふ中の誤をすこしく正せるなり、まことは五行といふ事もなし、相生相剋もなし、玄かれども久しく世の風となれ、ば、さても有なむ。

〔言繼卿記〕天文二年九月十七日丁巳、從廣橋字切之事被申候、注遣了、光盛切 經、光信切 勻、光毅切 均、光敦切 足、光英切 京等也、切字、注迄付候て遣了、

〔日本書紀二推古十六年四月、小野臣妹子至自大唐、唐國號妹子臣曰蘇因高、
○按ズルニ、蘇因高ノ解ハ苗字篇修姓ノ條ニ在リ、